

『戦争とところ』

2018年03月28日

沖縄戦・精神保健研究会が『沖縄からの提言 戦争とところ』を編集、上梓している。トラウマという言葉は広く知れ渡っている。限界を超えた衝撃を受けた時、心に残る傷のことで、その傷が、後に思わぬところで現れることを、心的外傷後ストレス障害（PTSD）と言う。日本では、阪神淡路大震災の時、PTSD の概念が一般に知られるようになった。第一次世界大戦でシェルショック（爆弾衝撃症）と捉えられたのが、PTSD 概念の原型である。ナチスによるホロコーストからの生還者、ベトナム帰還兵、最近では、アフガン・イラク戦争からの帰還兵などが負った PTSD の研究が精力的に進められている。デイヴィッド・フィンケルの『帰還兵はなぜ自殺するのか』は衝撃的な報告である。

日本では戦時中、「皇軍に砲弾病なし」というプロパガンダが流されたが、実際に「戦争神経症（PTSD）」が発生した。軍部は戦争とは関りないと「戦時神経症」と呼び、治療をした。しかしそのカルテは、敗戦の時に焼却された。戦争の記憶や責任に向き合おうとせず、PTSD も抑え込み、経済成長にすり替えて来たのであろう。

沖縄戦は、沖縄の海を埋め尽くした米軍艦隊からの「鉄の暴風」と言われる艦砲射撃から始まった。島の緑を焼き尽くすほどの凄まじいものであった。18万3千人の米軍が読谷村に上陸し、逃亡する日本軍を追って、南下した。その時、県民は軍隊の保護を求め、軍と一緒に南下した。それが、民間人の戦争被害者を多く出すことになった。集団自決（集団強制死）を生み、日本兵からはスパイ扱いされ、また、壕から追い出され、悲劇が増幅された。広島に原爆が投下された翌日、救援隊が入っているが、沖縄では、故郷を追われ、家族と離れ、食糧もないまま、恐怖の戦火の中に放置された。県民の4人に1人が戦死し、辛うじて生き延びた人々は米軍の収容所に閉じ込められ、解放されて出て来た時は、自分の故郷は米軍基地になっていた。沖縄の友人たちから聞いた話を思い出す。艦砲射撃は本当に怖かった。日本兵たちは自分たちのことしか考えず、県民を守る意思は全くなく、侮辱し続け、とにかく恐ろしかった。一方、占領軍として来た米兵は、聞いていた噂と違い優しくかった。戦争は悲惨を極め、軍隊は国民を守らなかったのである。

『戦争とところ』は、沖縄戦の惨さや戦後の苦労も書いているが、戦争がもたらした心の傷痕 PTSD に焦点を当てた研究を積み重ねて報告をしていることに意義がある。戦後は、「生き残った罰としてこんなに苦しんでいます」という言葉がはやった。戦争の体験と生き残った罪責観が心を苦しめたのである。沖縄県民たちは生活に追われ、必死に働いた。老年期に入り、ふとした喪失体験を契機に、戦時記憶がフラッシュバックし、自分自身が保てなくなった。深刻な PTSD の多くの事例から、沖縄戦で受けた心の痛手の深さを改めて知らされ、慄然とした。戦前には差がなかったが、戦後、沖縄では心に病を負った人々は全国平均の2倍だそうで、沖縄戦の PTSD であろうと言われている。戦争体験を克明に記憶し、それを話し、乗り越えて来た証言もあるが、言葉に出せず、悲しみを心の中に鬱積させている人々も多い。高里鈴代氏は、砲弾の音は止んだが、性暴力という新たな戦争が起こっていると言う。米軍が上陸した時から現在に至るまで、性暴力は収まらず、被害者の人生は破壊され、口を噤んでいる現実を報告している。沖縄・精神保健研究会会長の當山富士子氏は「あとがき」で「沖縄戦は、まだ終わっていない」と書き、PTSD からの癒しに尽力している。そして、「戦争というものが、如何に愚かで恐ろしいことなのか、そして如何なる理由があるにせよ、二度と戦争を起こしてはならないということが、読者の皆様へ伝わってくれることを切に願うものである」と書き、沖縄からの提言としている。